

そうに聞いていた高校生たちも真面目な顔つきで聞いていました」(阿部哲人)

(f) 仮設住宅支援 (石巻市南境)

「仮設住宅の集会所で、桜丘高校生徒と住民との交流会がありました。仮設住民の方によると、そこではこのような交流会が楽しみであり、勇気をもらい、生きることの喜びになっています。この交流によって、震災で傷ついた心をいやすことができるんだと、肌で感じました。高校生は、修学旅行でボランティア活動ができてすごく嬉しいと語っていました。人は助け合って生きていくことが重要だと再認識しました」(伊藤慎之介)

(g) 私立ひばり幼稚園 (石巻市蛇田)

高校生は園長先生のご講話を聞き、園児と遊び、砂場の整備、清掃、園庭の草取り、被災時の園周辺のビデオ視聴、被災民家跡地・仮設商店街の見学などを行いました。「震災のとき幼稚園がどのような行動をとったのかを知れた」(高校生)という意見があります。

(h) ゆめハウス (女川町)

現場は太平洋に面した漁村の丘で、津波被害を受けたところです。元倉庫の建物を修理し活動拠点にしています。今は農園でイチジクやトウガラシを栽培し、商品化しています。ここでは、お弁当の仕出しも行うカフェ、小物づくりなど様々な活動をしています。高校生は手分けして、農作業、小物を入れる木箱の製作、新商品企画、ポスター作りなどの活動に取り組みました。

(i) イーストファーム宮城 (東松島市)

「桜丘高校の生徒さんたちはイーストファーム宮城の赤坂農場内でシクラメン、ラベンダー、コットンなどの花を植えたり、草むしりをしたり自然に触れる活動をしました。普段身近にない植物と接するのは慣れていないようでした。珍しそうに活動し、有意義な時間が過ごせたようでした。最後に集合写真を撮る際にカメラマン役を引き受けましたが、生徒たちの手には汚れがついていて、皆疲れ切っていました」(末永大夢、針生哲也)

(j) 牡鹿漁業 (石巻市鮫浦湾谷川)

現場は石巻市内牡鹿半島で、石巻専修大学からはもっとも遠いところです。高校生たちは被災体験談を聞き、ホヤ養殖に使う牡蠣殻の選別作業を行いました。移動に時間がかかるため、作業時間はあまり長くできませんでした。ホヤという食べ物について東京の高校生たちはなじみがなかったようです。

桜丘高生石巻圏でボランティア

5月8日、東京都北区の私立一貫校桜丘中学・高校の高2生約370名が石巻にやってきました。修学旅行の一環で、前日は南三陸町で津波被災地の様子を視察してから石巻入りし、夕方岩手へ向かう行程でした。この日午前中は石巻専修大学で坂田隆学長の講演と特別授業を受け、午後は石巻市、東松島市、女川町の次の10か所各30~40名程度のグループに分かれ、ボランティア活動を行いました。参加高校生と石巻専修大学生の視点を交えながら、作業の様子をご紹介します。

○ボランティア活動先

(a) 桜守りの会 (女川町)

山に柚子と山野草の生息スペースを作るため、伐採された杉丸太を運ぶ作業を行いました。この作業後のアンケートには、高校生から「みんなの役に立てた」「復興に携われた」「都会ではできない経験」、逆に「木を運ぶだけはつまらなかった」等の意見があります。

(b) 雄勝花物語 (石巻市雄勝町)

高校生たちはパンジー、ブルーベリー、チューリップなどの花壇の苗植えや雑草取りなど、手入れを行いました。ここは津波に襲われ集落から60名もの犠牲者を出したところです。被災者の経験談と、津波に洗われた土地に花壇だけの光景が高校生の印象に残ったようです。

(c) 硯生産販売協同組合 (雄勝町)

高校生たちは雄勝町の旧中心街において、子供たちの遊び場を作るための空き地の雑草抜きを行いました。見学した大学生もこれに加わりました。「これからもこのような活動をしていきたいと思います」(矢野敢基)

(d) 学校再生プロジェクト (石巻市雄勝町)

公益社団法人 Sweet Treat 311 が進めている旧桑浜小学校を宿泊施設など人が集まる場所にするプロジェクトに高校生が協力しました。「私たちも荷物運びなどをし、少しでも手助けができました」(矢野敢基)

(e) 仮設住宅支援 (石巻市渡波)

「高校生が仮設住宅を訪問し交流を深めるため、仮設の大広間に8人ほどのグループに分かれた高校生40名程とおじいさん、おばあさんが集まりました。皆、お茶やオレンジジュースを飲んだり漬物を食べながら談笑していました。印象に残ったのは、「津波が来るとは思わなかった」という言葉でした。警報が鳴っても皆、地震の後片付けをしていたということでした。最初は楽し



コスタビクトリア号寄港ならず

5月10日(日)、石巻港雲雀野埠頭にイタリアの大型客船コスタビクトリア(総トン数75,116t)がやってくる、はずでした。というのは、この日、石巻港沿岸はものすごい強風で、波も高く、着岸予定だった雲雀野埠頭に横付けすることができなかつたのです。

この船は博多発着・台湾・石垣島6日間、横浜発着・濟州島(韓国)・佐世保(長崎)奄美大島クルーズ7日間という旅の後、佐世保発着・春の日本一周クルーズ10日間の一環として石巻を訪れるはずでした。乗客数3,000名規模という大きな船で、石巻市・東松島市・女川町などの観光関係者はいつも以上に歓迎の気持ちを強めていましたが、お客様に会うことはできませんでした。沖にタグボートに引かれて停泊している大型船ははっきり見えるのですが、一度岸に近寄ったと思うと沖に戻り、そのまま着岸中止の決定がなされました。

実際この日の風はものすごく、立て看板が次々に倒れ、安全のために立てている金属製のフェンスが風で倒れるため、運営側のスタッフも倒れたフェンスを立て直すだけで消耗していました。私たちのテントも風で飛ばされそうになるため、6本の足に一人ずつしがみつき押えましたが、それでも風に押されてテントが少しずつずれ、売り物を置いた机も押され、後退していきました。売り物や販売促進用の張り紙を飛ばされることもしばしばでした。「来てくれて買ってくれた人々や商品が風で飛ばされたときに拾ってくれたとなりの店の人たちにはとても感謝しています」(野呂和史)

この日、雲雀野埠頭では「第14回港湾感謝祭&ウェルカムフェスタ2015」が用意されていました。通常は別日程で行われる二つのイベントを組み合わせる多くの乗船客を歓迎する予定だったのです。学生は次に記録しています。「陸上ブースでは伊達武将隊による演武や高校生による様々なパフォーマンスが行われるステージでお客様を歓迎し、屋台、特産品販売店が多く出店していました」(三國翼)

経済的損失について、学生は次のような感想を書いています。「コスタビクトリアが来なかったことにより旅行会社やほかの店の人たちはお金を損してしまつたことになりました」(伊藤慎之介)

港湾感謝祭との合同イベントは、結果的に地元のお客様にとっては良かったと思います。大きな船を見るために集まった近隣の住民が港湾感謝祭に参加することができたため、完全な無駄足にはならず済んだのです。港湾感謝祭に日本製紙石巻工場などの地元企業や行政、飲食店等がテントを出し、特設ステージもあったため、楽しめる空間ができていました。その意味で、港湾感謝祭が一種の緩衝機能を果たしたようです。

私のゼミも地元客依存でした。「私たちのゼミは朝、7:30に埠頭に集合し、テントの下で他業者さんと一緒に作った商品や石巻専修大学関連の商品の販売を行いました。事前に準備し販売に向けて活動していたのですが、当日は強風による荒波でした。9時前につく予定のコスタビクトリア号も10時になつてもつかず、結局、来ないことになったため、夕方までの活動予定が午前中でお開きとなりました。船が来ない中、地域のお客様が売り上げに貢献してくださいました」(末永大夢)



にっぽん丸石巻港へ

5月15日(金)午後、にっぽん丸(21,903t)歓迎イベントが石巻港で行われました。寄港中止となつたコスタビクトリアから5日後、好天がうれしいばかりでした。石巻専修大学は埠頭で大学グッズや地元企業作のアクセサリ、ゼミ作のグッズを売りました。

「商品を仕入れて売るまでの過程を初めてしましたが、貴重な経験になりました」(伊藤慎之介)

「そこで自分は人との会話やコミュニケーションを学びました。自分はどちらかというとコミュニケーションが苦手です。が、歓迎イベントのおかげで少しでも苦手なことに挑戦することができたので、自分にとっても良いイベントだと思いました」(矢野敢基)

石巻市内の手芸品製作・販売グループ「名振マザーマイサンガ」「ばっばコーポレーション」が私たちと同じテントで販売活動を行いました。販売時間は長くはありませんでした。とくに名振…のマイサンガは乗船客として石巻を訪れた皆さんによく売れたようでした。「祈り」のイメージのあるマイサンガは、今、石巻を訪れるお客様が心引かれる商品なのでしょう。



津波対策ビル見学

東日本大震災での被災後、石巻市には津波対策ビルが建設されています。にっぽん丸寄港時の5月15日、庄子ゼミと丸岡ゼミの学生がその一つを見学しました。この建物や行政機関が、客船のお客様の視察先になる可能性があると考えてのことです。

避難ビルには非常時の食料備蓄や外側から自由にあげられる鍵のついたドアで屋内と結ばれた非常階段がついています。最上階4階にオフィスのある海上保安署の職員の方の話を聞きました。この海の警察官とも呼べる行政機関は、映画「海猿」で描かれた海難救助や海の犯罪を取り締まる、やりがいのある仕事です。

「東日本大震災のような事態への対応の努力をしていると思いました。自分は将来、公務員になりたいと思っています。今回の話を聞いて、自分の将来に少しでも近づけたのでこのような交流はとても大切だと思いました」(矢野敢基)